人文地理第58巻第1号抜刷
2006年2月28日発行

小牧実繁の「日本地政学」とその思想的確立

——個人史的側面に注目して——

柴田陽一

小牧実繁の「日本地政学」とその思想的確立

——個人史的側面に注目して——

柴田陽一

Ⅰ 緒論
Ⅱ 「日本地政学」の思想的背景
(1) 「日本地政学」以前のあゆみ
(2) 英国観の転換
(3) 移民問題と満州
(4) 地理学をめぐる問題意識
Ⅲ 「日本地政学」の確立
(1) 「日本地政学」のはじまり
(2) 探検史研究
(3) 地理学から地政学へ
(4) ドイツ地政学批判
(5) 日本の主体性
(6) 使命および方法論
Ⅳ 結論

キーワード：小牧実繁，日本地政学，京都帝国大学，地理学史，個人史的研究

Ⅰ 緒論

小牧実繁（1898–1990）が京都帝国大学地理学教室の関係者とともに構成した「吉田の会」[1]は，1938年から45年にかけて，「日本地政学」の名のもとに多面的な活動を展開した。その活動は当時，言論界や地理学界で一定の支持を得[2]，日本の地理学史上に一定の位置を占める存在である。

しかし，戦後，小牧の「日本地政学」を本格的に取りあげた研究は見受けられない。もちろん戦後，地理学界において，「日本地政学」への論及がなされてはきた。そこでは，「日本地政学」が大日本帝国の侵略戦争，あるいは帝国主義を正当化したという結果が注目され，批判の対象となった[3]。また，科学的か否かという視点から検討がおこなわれ，「日本地政学」は，「皇道」を「指導理念」とする非論理的な考えとして批判された[4]。

こうした批判には，戦前の思想に対する批判を前提とする戦後民主主義・平和主義の思想が少なからず影響していたように思われる。すなわち，批判の焦点が「日本地政学」による戦争の正当化という一点に集中していた。結果として，これらの論考には，小牧の代表的な著書以外に検討を拡げようとしない傾向が見られた。こうして「日本地政学」は，戦争の正当化と非科学性が注目されるあまり，その思想が単純化

1) 「吉田の会」は陸軍から資金援助を受け活動していた地政学研究グループである。「通称『吉田の会』による地政学関連資料」空間・社会・地理思想6，2001，59–112頁。

2) 「吉田の会」のメンバーの一人村上次男は，小牧の『日本地政学宣言』は，「米英との戦争状態にはいってからは，東京の白揚社から再刊され，多くの賛同者を獲得したらしい」と述べている。事実，同書は計5つの版が出された。村上次男『八十歳の回想』（私家版），1993，66–67頁。

3) 例えば①杉野圀明「経済地理学と世界経済—地政学批判—」立命館経済学19，1970，442–459頁。②水岡不二雄「現代地理学における『地政学』の復活」経済119，1974，175–196頁。③竹内啓一「日本におけるゲオポリティクと地理学」一橋論叢72，1974，180–182頁。

4) 例えば①前掲3）③178–182頁。②福間良明『辺境に映る日本—ナショナリティの融解と再構築—』柏書房，2003，329–334頁。

され，一面的な理解しかなされてこなかった。

このように，戦前，特に1937年から1945年にかけての戦時期をいわば特別視し，それと正面から向き合おうとしない姿勢は，地理学界にとって生産的だとはいえまい。そのような姿勢は，「日本地政学」がなぜ成立し得たのか，なぜ支持されたのかという視点を欠如させるからである。この視点なしでは，帝国主義時代の地理的知の一つである「日本地政学」の検討は貫徹しない。

一方，「日本地政学」を当時の文脈において解釈しようとする研究がある。この研究は戦後すぐに若干の例があり，1960年代以降継承されることはなかったが，近年再び目につくようになった。これらの研究が示唆するところによれば，「日本地政学」は，当時の主流地理学を次の3点で批判した。すなわち，静的・記述的であった点，人間の役割を軽視していた点，西洋の模倣に終始し象牙の塔にあって化石化しつつあった点である。そして「日本地政学」には，特に，実践的な地理学を打ち立てようとしたり[5]，人間精神を復活させたり[6]，学問における価値観の問題を投げかけたりした[7]という側面があったとされている。しかし，それらは「日本地政学」の主唱者小牧の地政学思想の全容を分析したというよりは，断片的な示唆にとどまるものだった。

以上のような従来の研究に対して，本稿は，「日本地政学」を正面から取りあげ，その主唱者小牧に，とりわけ，従来顧みられることがなかった彼の個人史的な側面に注目し[8]，彼が「日本地政学」という思想を形成し，成長させていく背景や過程を検討する試みである。本稿では，以下括弧を省略して日本地政学という言葉を使用するが，それはあくまで小牧の主張した「日本地政学」に限定して用いる。Ⅱ章では，日本地政学を主張する以前の彼の経験と思想的な志向性に注目し，彼が日本地政学を主張するに至った思想的背景を検討する。それをふまえてⅢ章では，彼が主張した日本地政学の思想的構成がいかなるものなのかを検討する。これらの検討を通して，Ⅳ章で日本地政学の思想的な両義性を考察する。

時期としては，主に日本地政学の確立の時期を扱う。アジア太平洋戦争（「大東亜戦争」）開戦とともに，日本地政学は確立の時期から展開の時期へ移行する。なぜなら開戦後，小牧は地政学的文章の発表数を飛躍的に増加させ，プロパガンダ的活動を多面的に展開することになるからである[9]。1940年に『日本地政学宣言』を刊行した後，小牧は地政学的文章を発表する場を獲得したものの，アジア太平洋戦争開戦こそが小牧に活動の場を与えることになったといえよう。本稿で扱う確立の時期とはそれ以前の時期であり，小牧が日本地政学を構想・確立していた時期である。

本稿で筆者は次のような手法で考察を進めていきたい。第一に，時代的・社会的背景とともに，小牧の個人史的な背景を重要視する個人史的研究をおこなう。その際，小牧が述べたことのみではなく，彼がいかに，なぜそれを述べたかということまで追究する。また，「ナショナ

5）例えば①水野元「地政学に対する私見」地理学報告2，1953，53頁。②入江敏夫・石田龍次郎・小堀巌・馬場四郎・大村栄『地理教育の革新』同学社，1953，87-94頁。③久武哲也「ハワイは小さな満州国—日本地政学の系譜—」現代思想28-1，2000，66-78頁。

6）前掲5）①53頁。

7）①Fukushima, Y., 'Japanese geopolitics and its background: what is the real legacy of the past?', *Political Geography*, 16, 1997, pp. 416-420.②前掲5）③66-78頁。③岡田俊裕『地理学史—人物と論争—』古今書院，2002，97-101頁。

8）個人史的考察の有効性については，岡田俊裕『日本地理学史論—個人史的研究—』古今書院，2000。

9）柴田陽一「小牧実繁の著作目録と著述活動の傾向」歴史地理学223，2005，47-56頁の小牧実繁著作目録を参照のこと。また筆者は，小牧の文章から地政学的色彩が薄れる日本地政学の崩壊の時期を，1943年後半以降に措定する必要を感じる。展開の時期や崩壊の時期については稿を改めて検討したい。

リスティックな言説を突き放してしまうのではない批判のあり方[10]」を考慮する。つまり筆者は，ナショナリスティックな小牧の言説を，ナショナリスティックであることを理由として直ちに否定も肯定もしない。むしろ，その言説に込められた意図に注目する視点に立つ。なお，本稿は事実関係を把握することも目的とする。なぜなら山野の研究を除けば，従来の研究は，事実関係の究明が進められているとはいいがたいからである[11]。

第二に，文献実証主義の姿勢を堅持し，戦後の回想やインタビューなどではなく，戦前の小牧の言説に依拠して検討をおこなう。すでに筆者は，前稿において彼の自筆目録に基づき，より充実した著作目録を提示しており[12]，本稿ではそれを利用し考察をおこなう。ただし，戦時期の小牧の文章には執筆者と記載内容の２つの問題がある[13]。本稿で特に注意を要するのは，執筆者の問題である。戦時期の彼の文章には，一部「吉田の会」のメンバーが代筆したものが含まれている。したがって，筆者は代筆者名が判明する文章については，それを明示するように努めるが，そうでないものについては，小牧の著作として扱うことにする。これは小牧の名のもとに発表された文章である以上，彼の思想がそこに反映されているという考えに基づいている。

II 「日本地政学」の思想的背景

（1）「日本地政学」以前のあゆみ　まず，地政学を主張しはじめる前の小牧のあゆみを概観しておく。彼は1898年に，現在の大津市下阪本にある酒井神社の神職を務める家に生まれた。1916年に第三高等学校に入学，卒業後，1919年に京都帝国大学に入学し，1922年に文学部史学科地理学専攻を卒業する。卒業論文は「海岸の研究―河北潟を中心にして―」であった。このテーマは小川琢治の勧めにより選んだものだった。同年大学院に入学，1925年に助手，翌年講師になる。1927年春，考古学者の浜田耕作に連れられ満州を初めて訪れた後，その夏から1929年秋までヨーロッパへ留学した。留学中，主にパリに滞在していたが[14]，1928年７月には英国で開催されたIGCに出席，歴史地理部会で「先史地理学研究の必要性」と題し発表もおこなった[15]。1931年に助教授になった後，1937年に文学博士の学位を取得した。学位論文は「先史地理学研究」であった。

この間，1930年と1932年に，中華民国および満州を旅行あるいは出張で訪れている。さらに，1938年１月には，台湾視察旅行に出かけている。そして，1938年３月末教授に就任し，地理学教室の運営に本格的に携わることになった。この時点までの彼の学問的関心は，海岸研究，考古学，民俗学，民族学，先史・歴史地理学といった広がりを見せていた。

この小牧が日本地政学を主張しはじめたのは，1938年11月の「地理学に志す人へ」という文章上である。「地理学から発展すべき新日本地政

10）前掲４）②378-379頁。
11）①山野正彦「探検と地政学―大戦期における今西錦司と小牧実繁の志向―」人文研究51，1999，1113-1144頁。なお，最近，かつて日本地政学研究に従事した関係者の証言や回想などにより，「吉田の会」と軍の調査・戦略との関わりが示唆されている。②前掲２）。③正井泰夫・竹内啓一編『続・地理学を学ぶ』古今書院，1999。④前掲８）194-269頁。⑤前掲１）。ただ，「吉田の会」と軍の関係は今なお不明確な点が多いので本稿での言及は最小限にとどめる。
12）前掲９）47-56頁。
13）前掲９）59-60頁。
14）小牧が元々ドイツに留学するよう命じられていたにもかかわらず，フランスに滞在した理由は，同国に著名な先史遺跡が多く存在し，博物館や先史学の研究所が充実し，とりわけ旧石器の研究において他国を圧倒していたからである。足利健亮「小牧実繁と歴史地理学」（京都大学文学部地理学教室編『地理の思想』地人書房，1982）211頁。
15）小牧の発表（Sur la Nécessité de la Géographie préhistorique）は，当時地理学界の権威だったペリエー（Perrier, G）らの共鳴を得た。小牧実繁「わがおもひでの記」古代文化37，1985，267頁。

学が歴史的伝統的なる日本精神と共に，吾が国策の基礎，建設の骨組でなければならない」，すなわち「既成地理学，文検地理学」とは異なり，「新日本地政学」は「揺るぎなき国策の基礎となる」ものであると彼は述べた[16]。この年彼は，3月の教授就任後，5月に日本を発ち，7月にはIGC（オランダ）に参加，その後ヨーロッパ各国を旅行し，米国経由で9月末に帰国している。そして，帰国直後に公表したのが，この「地理学に志す人へ」であった。では，彼が従来の地理学と袂を分かち，「国策の基礎となる」日本地政学を主張するに至ったのはなぜか。筆者はその背景として，小牧の国際情勢の認識と彼の学問観に注目する。まず，彼の国際情勢の認識をあらわす一つ目の例として，彼の英国観の転換を，二つ目の例として，移民問題と満州を取りあげる。

（2）英国観の転換　1927年9月，小牧は初めて英国を訪れた。それは同年7月在外研究員としてヨーロッパ留学をするため日本を発ち，浜田耕作とともに米国を旅行した後のことであった。小牧は同年12月末まで英国で過ごした。その後1929年に帰国するまで，彼は主としてパリに滞在していたが，翌年7月のIGCに参加するため，再度英国を訪れている。帰国した彼が再び英国を訪れたのは1938年8月であった。

二度にわたる英国訪問の後，彼は日本地政学を主張するようになったわけだが，その際，彼が掲げた目標の一つが，「英国等旧秩序維持勢力」がアジアなどの植民地でおこなった政策の結果生じた「歪曲」や「矛盾」の発見とその是正であった[17]。彼の目には，「英国等旧秩序維持勢力」が経営する植民地の実態は，後述する「本然の姿」から逸脱したものとして映った。また，日本地政学の主張には，英国に対する彼の強い反感が見受けられる。では，二度英国を訪問した小牧は，それぞれの時点で，どのような英国観を抱いていたのか。その間の変化の跡を把握することが，日本地政学の思想的背景の解明につながるだろう。このように筆者が，小牧の英国観に注目するのは，彼が近代を「あらゆる領域に於いて欧羅巴，殊に英国の覇業が成功を贏ち得た時代であり，世界の凡てが欧米的殊に英国的秩序に編成し尽されんとしつつあつた時代である[18]」と考えていたからである。また，確立の時期において，英国に関する彼の記述は，管見の限り，他の諸外国に比べ抜群に多い。つまり，英国こそが近代世界の覇者であり，当時の世界秩序を維持しようとしていた国だと彼は注視していたのである。したがって，日本地政学の思想的背景を探るには，彼の英国観に注目しなければならないだろう。

まず，「英蘭雑記」（1934年末執筆）や『日本地政学宣言』のなかの回想によれば，1927～8年の時点で，彼が英国を大変好ましいものと見ていたことがわかる。「あこがれの国，英国」で彼は英国人の性格，英国のやり方に大変な感銘を受けた[19]。また，彼は「英国の地理学は仏独の長所を兼ね備へた上に自ら特有の目的を有し，而もその目的が遠大である。生きた学問といふ感じを与へる。…世界と人類とを相手にするには英国式の地理学を学ばなければならぬ[20]」と述べた。さらに，1927年11月，挙国一致の厳粛な雰囲気のなか執りおこなわれた「欧洲大戦休戦

16）小牧実繁「地理学に志す人へ」京都帝国大学新聞11月5日，1938，5面。
17）小牧実繁『日本地政学宣言』弘文堂書房，1940，86頁。
18）前掲17）72頁。
19）小牧実繁「英蘭雑記」地理学5，1937，237頁。この文章は，末尾（429頁）の「昭和九年十二月二十九日稿」という記述から，1934年末に執筆されたものであることがわかる。
20）前掲19）425頁。

記念日」の行事をロンドンで目の当たりにした彼は，大きな衝撃を受けた[21]。その日彼の「たましひは故国を思ひ，祖国を憂へて大きく揺れた[22]」。そして，彼は「軍国主義者[23]」になると同時に，心には「愛国心」がみなぎった[24]。ここから，1927～8年の時点で，彼は単純に英国をすばらしいと思う一方，他方では英国の偉大さに圧倒され，英国恐るべしの感を強くしたことがうかがえる。そして，ひるがえって日本の情況に思いを馳せる彼の胸中に，軍事力を用いて世界中に植民地を拡大していたヨーロッパの「覇道主義」に抵抗する思想が芽生えるとともに，愛国心がみなぎったと推察される。

次に，1938年の時点の小牧は，一転して英国を毛嫌いするようになった。彼は日記で，「英人の群あり。…態度何だかにくらしき程なり。実際好感の持てぬ人種なり[25]」などと英国に対する反感をあらわにしている。また，10年前と比べて風紀が乱れた「ふしだらな英国[26]」に，彼はかつての英国の姿を見出せず，「英国が今や正に滅亡の前夜にあること[27]」を確信した。この観察に基づいて，帰国後彼は「確信を以て米英打つべしと主張」するようになったのである[28]。

では，彼の英国観はなぜ変化したのか。ここで注意すべきは，「英蘭雑記」の執筆が1934年末であることである。それ以前に彼が英国について否定的な文章を発表していないことから，最初の英国訪問後少なくとも6，7年の間は，当初の英国観を維持していたと思われる。では，1934年から1938年の間に彼の英国観が変化したのは，どのような事情によるのだろうか。容易に想像されるのは日中戦争（「支那事変」）や満州事変との関係である。

では，彼はこれらの出来事をどう見ていたか。まず，日中戦争については「国民政府は吾が対支政策を以て帝国主義的侵略と誤認し，英仏等の現状維持派勢力，並びにソ聯の赤色侵略的勢力に踊らされ，その伝統的以夷制夷，遠交近攻の愚作に出てゐるのであるが，大観すれば，これは兄弟の争に過ぎないのである[29]」という発言に集約される。この見地に立って，日中戦争の根本的解決は「支那を今日の情勢に陥れた背後勢力を打倒する以外には存し得ない[30]」と彼は考えていた。「背後勢力」とは「英国を首魁とする米仏等既成勢力」やソ連のことである[31]。

次に，満州事変を彼は「日本の現状維持的諸勢力に対する痛烈なる反撃」であったと見ていた[32]。つまり，第一次世界大戦後，ヴェルサイユ体制，ワシントン軍縮会議（それによる日英同盟破棄）や各種の経済攻勢に苦しめられてきた日本が，初めて反撃の烽火を上げたのが満州事変，そしてそれが独伊の急激なる台頭を促し，さらに日中戦争の勃発を促したというのが当時の彼の情況認識だった[33]。日本と独伊に共通しているのは，英国や米国などの現状の世界秩序の維持を目論む勢力を打破しようとする動きであった

21）前掲17）192頁。
22）前掲17）193頁。
23）久武の指摘によれば，ここでの「軍国主義者」とは，ヨーロッパ強権政治と闘う者の意である。前掲5）③69頁。
24）小牧実繁「日本地政学の構想展開」政界往来12-8，1941，66頁。
25）前掲17）4-5頁。
26）前掲24）66頁。
27）小牧実繁「英国は滅亡す」大和（国鉄奉公運動機関紙）2-9，1942，6頁。
28）前掲27）6頁。
29）前掲17）36頁。
30）前掲17）121頁。
31）前掲17）121頁。
32）小牧実繁「南方政策の確立」日本教育1-1，1942，11頁。
33）1933年，日本が満州事変を侵略と断じられたことに反発して国際連盟を脱退したことも合わせて考える必要があろう。小牧は同連盟総会決議でタイが棄権したことを評価している。小牧実繁『世界新秩序建設と地政学』旺文社，1944，313-314頁。

ため，そのような日本の国策に賛同する彼は，かかる情況認識を持つに至り，英国観も大きく転換することになったと推察されるのである。こうして彼は二度の英国訪問後，西洋列強による植民地主義の批判を目標とする日本地政学を主張していくことになった。

（3）移民問題と満州　このような小牧の反西洋的な志向に影響を与えていたもう一つの要素が，移民問題である。特に，彼と満州の関わりは重要な意義を持つ。彼が満州を初めて訪れたのは，1927年4月に，浜田耕作に連れられ東亜考古学会第一回発掘に参加した時である。彼はその時のことを述懐した文章で，中国大陸に対する関心を表明している[34]。彼自身「京都帝国大学文学部地理学教室の伝統的関心は東亜の天地に向けられてゐた[35]」と述べているように，同教室の大陸への関心は小川以来脈々と受け継がれてきたものであるが，小牧もその例に漏れなかったのである。

1928年6月，彼はパリで梅原末治ら3人と満州問題について議論した。当時その問題に対して知識人は概して無関心だったが，彼は「満洲問題に対する一家の主張を有してゐた[36]」。この彼独自の満州論は，彼によると「理論的な研究の帰結として」出てきたものではなく，「昭和二年の満洲旅行や…英国に於ける休戦記念日式典に関する体験などから相当深刻に日本の将来に就いて考へさせられてゐたこと」から形成されたものである[37]。また，彼は彼独自の満州論について，「日本地政学の一端が早くも此の時既に結実してゐたと言へる[38]」とさえ述べている。彼が自らの満州論を語った文章は現時点では見出せないが，それは「満洲国」を建国すべきといったように，日本にとっての満州の重要性を説くものであったと思われる[39]。ここから彼が満州に対して強い関心を持っていたことがうかがえよう。そして，満州に思いを馳せる彼の前に横たわっていた問題こそ移民問題であった。

「満洲国」建国後，満州への移民問題は日本の一大関心事であった。オーストラリアや米国で苦い経験をした日本にとって，それは切実な問題であった。オーストラリアは，白豪主義と呼ばれる一連の政策の一環として，1912年にアジア人移民を禁止した。「大学卒業後間もない若年の地理教師として…白濠主義の非道と不合理とを…痛論した[40]」と述べるように，小牧は1920年代半ば，すでに白豪主義に憤りを覚えていた。日本地政学主張後，彼が一貫して白豪主義を批判するようになった背景には，このような経緯があった。一方，米国は，1924年の排日移民法により日本人移民の入国を禁止した。前述のように，1938年に米国経由で帰国した彼は日記に，シアトルやヴァンクーヴァーの日本人移民の惨状と「満蒙」への期待を記している[41]。こうした人種差別と深く関わる日本人移民の情況を知る彼は，満州こそは実に「東亜永遠の平和の鍵[42]」であると述べ，「満洲国」建国に大きな期待を寄せた。人種差別と密接に関わる移民問題，ならびにそれを解決し得る可能性を持つ満州に対する彼の関心は，日本地政学の重要な

34）前掲24）65頁。
35）前掲16）5面。
36）前掲17）196頁。
37）前掲24）67頁。
38）前掲24）67頁。
39）「満洲国」建国後，小牧はパリでともに議論した梅原から「小牧君，君に頭を下げねばならぬ…本当に君の言つて居られたやうになりましたがな」といわれたと記している。前掲17）198頁。
40）小牧実繁「濠洲地政論―日本地政学の見地より―」公論6-2，1942，136頁。「大学卒業後間もない若年の地理教師」とは，小牧が1923年から1925年の間務めていた第三高等学校講師のことを意味している。
41）前掲17）12-13頁。
42）小牧実繁『東亜の地政学』目黒書店，1942，52頁。

思想的背景であったといえる。

（4）地理学をめぐる問題意識　以上のような国際情勢の認識が日本地政学の形成を促した外的な要因だとすれば，内的な原動力となったのが小牧自身の学問観である。特に，地理学の実践性と景観のとらえ方をめぐる彼の考え方をたどれば，地理学それ自体の改革という意義が日本地政学に与えられていたことがうかがえる。

1919年に，京都帝国大学に入学した彼は，小川琢治と石橋五郎のもとで地理学を学んだ[43]。その当時の地理学を，彼は「既に実践性を失つてゐた地理学であつた[44]」と回顧する。彼は地理学の実践性を回復する使命を強く感じていた[45]。その彼が，最初の研究テーマとして海岸砂丘研究を選んだのは，実地調査を重視し，「机上地理学論」を批判すること[46]を通じて，「地理学に少しでも実践性をとり戻さう[47]」と意図したためであった。「管子も言ふ如く，地は政の本である。経世済民こそは実に東洋に於る地理学の伝統的理念であつた。然るに明治以降欧羅巴的思潮の瀰漫と共に我国の地理学も亦その本来の使命を忘れ，朝暮彼の地の学者の諸説を追ふに忙しく，その当然有すべき実践的性格を失ひ，国家経綸の基底たるべき任を荷ふに堪へざるに至つた[48]」と彼は考えていた。このように，地理学が元来実践的性格を有する学であったと考える彼は，地理学が本来の姿に戻れば，再び実践性を獲得し得ると考えていた。彼にとって，日本地政学とは「吾が国策に方向を与ふる如き地理学」であり，「真に実践的なる，清新なる実学」と位置づけられるものであった[49]。「吉田の会」を通じておこなわれた陸軍への関与は，当然ながらこの考えの延長上にあったといえる。さらに，彼のいう「実践」には，「国策」を鼓舞するような地理思想の唱道といったことも含まれており，例えば尊王攘夷思想のような外国観を地理学史の中に位置づけていく作業も，Ⅲ章で後述するように日本地政学の課題となっていったのである。

ところで，1930年代の地理学において，Landschaft（景観）は主要概念の一つであり，訳語や解釈が議論の対象となっていた[50]。このなかで小牧も，地理学に実践性を回復させることを意図し，彼独自の景観のとらえ方を提示した。小牧は，各々の土地の自然や文化は，その土地固有の秩序のもとに維持されるべきであるという思想を有していた[51]。彼は，「調和景観のために」という文章で，「未だ荒されてゐない僻陬の然し調和のある土地，自然や人間文化の全体は国宝以上の国宝である」と述べた後，各地の民俗は「調和ある景観」のうちに保存するのが最も適切であると述べている[52]。このような発想は，一見，環境と文化の調和を是とするものであり，その基底には，各地の民俗調査[53]の経験が

43）石橋に比べ，小川が小牧に与えた影響は大きい。藤岡は，小牧が日本地政学に向かった理由として小川の「戦争地理学研究」の影響を指摘している。藤岡謙二郎『多兎を追う者』大明堂，1974，27-28頁。

44）前掲17）184頁。

45）前掲24）65頁。

46）①小牧実繁「有明湾沿岸砂丘地域の研究」地球22，1934，83頁。これには1927-1929年のヨーロッパ留学の際，パリ・ソルボンヌ大学においてマルトンヌらから学んだことが関係していると思われる。彼らの主宰する巡検に小牧が度々参加していたことは，次の文献からうかがえる。②同「東ピレネーの春」地球17，1932，298-308，379-390頁。③同「巴里学時暦」地理学3，1935，757-762頁，地理学4，1936，1709-1713，2048-2053，2224-2228頁。④同「仏蘭西雑記」地理学5，1937，836-840，999-1007頁。

47）前掲17）185頁。ただし，同頁で，海岸砂丘研究を通じて，「地理学に少しでも実践性をとり戻さうと」したが，「結局何等の効果をも挙げ得ずして終つた次第である」と小牧は述べている。

48）小牧実繁「監修の辞」（別技篤彦『蘭領印度（世界政治地理大系）』白揚社，1941）。

49）前掲17）143頁。

50）岡田俊裕『近現代日本地理学思想史―個人史的研究―』古今書院，1992，177-247頁。

51）①小牧実繁「飛騨の民家風景」風景3，1936，26頁。②同「奥美濃の悲劇」中外日報9月26-27日，1936，1面。

52）小牧実繁「調和景観のために」風景3，1936，58頁。

53）①小牧実繁「近江野洲郡の伝承」郷土研究5，1931，326-328頁。②同「近江野洲郡の民俗」郷土研究5，1931，↗

あったようにも思われる。しかし，それは同時に，政治的な含意を伴うものであった。小牧は時として「調和景観」という言葉を「本然の姿」という言葉とほとんど同じ意味で用いている[54]。「本然の姿」とは「白人侵略以前の本然の世界，その自然と人間，風土と文化，いひ換へれば，その地理と歴史との特殊性に従つた，神ながらの世界[55]」を意味しており，彼は西洋列強の植民地を「本然の姿」にかえすべきだと主張し，西洋の植民地主義批判を試みていくことになる。

また，彼が民俗学の「精神的方面の知識」を，地理学研究に必要なものとして取り入れようとしていることからわかるように[56]，彼は地理学研究において，それぞれの景観における精神現象を度外視しては，真に景観を理解することはできないと考えていた。この思想は，日本地政学の持つ精神現象を議論する性格と関係していると思われる。このように民俗調査を通して民俗学に通じていた彼の日本地政学は，合理主義的な性格を持つ同時代の日本の他の地政学，例えば江沢譲爾のそれ[57]とは一種異なるものになった。前稿で言及したように，日本地政学は「吉田の会」のメンバーの思想の融合体であるが[58]，日本地政学が持つこの性格は，小牧の思想に由来すると考えてよいだろう。

以上，日本地政学を主張する以前の小牧の経験と思想的な志向性に注目し，彼が日本地政学を主張するに至った背景を考察してきた。これをふまえて，次章では，彼が主張した日本地政学の思想的構成を検討していこう。

III 「日本地政学」の確立

（1）「日本地政学」のはじまり　前章で述べたように，小牧が日本地政学という言葉を使いはじめたのは，1938年11月発表の「地理学に志す人へ」である。しかし，これは文献上の初出に過ぎない。アジア太平洋戦争開戦直後，「地政学をとりあげるのは支那事変の始まる前，少くとも三四年前であつた[59]」と述べていることからすれば，彼が地政学を取りあげたのは，遅くとも1937年まで遡り得る。

また，ジョ（Jo, Yung-Hwan）宛の書簡（1961年10月）のなかで，小牧は1938年IGC出席後にドイツを旅行した際，ハウスホーファーに会うのは容易だったが，「私は自分自身のやり方で日本の地政学を展開することについて考えていたので，故意に彼に会わないつもりでした[60]」と述べている。さらに，浅井宛の書簡（1978年）のなかで小牧は，「独乙関係には一人も知合ありません。学者も独乙の有名人無名人意識的に近づきませんでしたから私は日本的な井の中の蛙だったのです[61]」と述べている。ここからも，小牧が1938年の渡欧中，あるいはそれ以前から地政学を構想していたことがうかがえよう。

なお，1938年から1940年にかけて，小牧は探検に関する特殊講義をおこなった[62]。それは，実用的見地からおこなわれる世界各地の探検が，

↘ 372-376頁。③同「近江野洲郡の民謡」郷土研究7，1933，418-421，493-496頁。④同「久米島見聞誌」地球16，1931，23-47頁。⑤同「久米島民俗断片」民俗学3，1931，211-216頁。⑥同「吉野聞書」地理論叢1，1932，396-403頁。

54）前掲17）74頁。

55）小牧実繁『地政学上より見たる大東亜』日本放送出版協会，1942，108頁。

56）小牧実繁「地理学と民俗学」近畿民俗2-1，1937，15-16頁。

57）①江沢譲爾『南方地政論』千倉書房，1943。②江沢譲爾『国土と民族』目黒書店，1945。江沢の地政学は，「大東亜」の資源を最大限に動員するには，どのような空間再編をおこなえばよいかを突き詰めようとした点で，小牧の地政学とは異なり，合理主義的な性格を持つものだったといえよう。③前掲4）②335-340頁。

58）前掲9）60頁。

59）小牧実繁・野間三郎「研究室の扉を敲く(8)地理学教室」京都帝国大学新聞12月20日，1941，1面。

60）Jo, Y-H., *Japanese geopolitics and the Greater East Asia Co-Prosperity Sphere*, Ph. D. dissertation, The American University, 1964, p. 78.

61）浅井得一「バーモ暗殺未遂事件についての証言（補遺）」政治経済史学149，1978，19頁。

62）1941年から終戦までは，小牧は日本地政学に関する特殊講義をおこなっている。以下の文献を参照。①「京都帝国 ↗

世界を植民地化しようとする「謀略地政学」の基礎となる地理的認識を提供したという歴史的事実に注目したからである。[63] この探検と地政学との関係の概念上のつながりから推察するなら，彼が1938年度に探検に関する特殊講義をおこなうことを決めた時点に日本地政学のはじまりを求めることも，可能であろう。

以上のように，日本地政学のはじまりは，文献上は1938年11月だが，彼のなかではそれ以前，少なくとも日中戦争がはじまった1937年７月以前まで遡ることができよう。そこで，彼が日本地政学を主張しはじめた1930年代の時代背景を概観しておこう。

1931年の満州事変，翌年の「満洲国」成立宣言により国際的に非難された日本は，1933年に国際連盟を脱退した。国際的に孤立した日本の国内では，情動的・ロマン主義的なアジア回帰論が唱えられるようになった。西洋近代文明の限界を意識しつつ，西洋へのアンチテーゼとして東洋が対比されるようになりつつあったのである。[64] 皇国日本の価値，皇国日本臣民としての自覚ということが強く強調された。1937年７月，日中戦争がはじまり，同年９月には，戦争協力の強化運動である国民精神総動員運動が開始される。そして，1938年４月，国家総動員法が公布される。これにより，人的・物的資源を戦争遂行に集中できる権限が政府に与えられた。出版物は検閲され，思想統制は極限に達した。同年11月には，近衛声明によって「東亜新秩序」が示された。このような情勢に対して小牧は，例えば日中戦争勃発時の心情について，「私は大きく感ぜざるを得なかつた。何ものかを直観せずには居れなかつた…昂奮のあまり…悲憤の涙は自づと下るのであつた…何によつて国家に役立ち奉公の誠を尽すべきかには日夜苦慮して止まなかつた」[65] と述べている。ここから彼は当時の日本の針路に疑いを持つことなく，むしろ自らの学問を祖国のために役立てようとナイーヴに考えていたことがわかる。[66]

（２）探検史研究　小牧は，1940年８月に『近世探検史』[67]，同年10月には『日本地政学宣言』[68] を公にした。前者は，同年４月のラジオ講演の内容を収録したものであるとともに，1938年から彼がおこなってきた探検に関する特殊講義の内容が反映されたものである。その内容は，近世探検史という「近世欧羅巴諸国の世界侵略史」，そしてアジアから見れば「近世欧羅巴人の亜細亜侵略史」と解釈し得るものの整理だった。[69] このアジアから見れば「不名誉の歴史」となるものを彼が語ったのは，世界史の転換期に際し，世界に進出しようとする日本にとって，「今日に至るまでの世界各国の世界各地に対する進出の先駆をなしました探検の歴史」[70] は他山の石とすべきものだと考えたからである。一方，

↘ 大学史学科本年度講義題目」史林23，1938，201-202頁。②「昭和十四年度史学科講義題目」史林24，1939，228-230頁。③「昭和十五年度史学科講義題目」史林25，1940，300-302頁。④「昭和十六年度史学科講義題目」史林26，1941，175-177頁。⑤「昭和十七年度史学科講義題目」史林27，1942，310-312頁。⑥「昭和十七年十月史学科講義題目」史林28，1943，108-111頁。⑦「昭和十八年十月史学科講義題目」史林28，1943，423-425頁。⑧「昭和十九年度史学科講義」史林30，1945，81-82頁。

63）前掲17）95-96頁。

64）三輪公忠編『日本の一九三〇年代―国の内と外から―』創流社，1980。

65）前掲17）205-206頁。

66）小牧が感情の起伏の大きな人物であったことは，「私は幸運であつた」という意味のことを繰り返し述べている「修学院雑記」という文章からもうかがえる。①前掲17）180-209頁。他にも例えば，②小牧実繁「南太平洋の地政学―フィリッピンに重点を置いて―」大洋4-2，1942，28頁。③同「南方の地政学」（京都市教育文化課編『南方講座』京都市役所，1942）210頁。④同「大東亜の理念」（大日本言論報国会編『世界観の戦ひ』社団法人同盟通信社，1943）166頁。

67）小牧実繁『近世探検史』日本放送出版協会，1940。

68）前掲17）。

69）前掲67）１頁。

70）前掲67）２頁。

本書にアジア人による各地の探検史についての叙述は全くない。

この『近世探検史』に続いて『日本地政学宣言』が刊行されたのには，必然的な理由があった。小牧によれば，探検と地政学はともに「国家乃至は民族活動の先駆的なるもの」[71]であるが，両者には大きな違いがある。探検は「近世的」であり，「近世資本主義国家，即ち欧米諸国による世界の植民地化の先駆運動」や「欧米による世界搾取の予備運動」の役割を果たしたとされる[72]。したがって，「世界の搾取をやらなかつた」日本にとって，「その先駆運動としての探検などを行ふ必要はなかつた」[73]。このように考える小牧にとって，間宮林蔵や最上徳内の行為は探検ではなく，「巡検」ということになり，『近世探検史』には，日本人の探検が記される必要はなかった。一方，地政学は「現代的」[74]であり，「米，英を首魁とする金融資本主義国家による世界の旧秩序を破壊してそこに世界の新秩序を齎さんとする建設計画の科学的武器たらんとする」[75]ものである。したがって，『近世探検史』に続いて『日本地政学宣言』が公刊されるに至ったのである。

ただ，彼のいう間宮や最上の「巡検」は，日本人による北海道以北の領土拡張の「先駆運動」だったのではないかという疑義をはさまずにはおれまい。「探検」が西洋列強の「世界の植民地化」の「先駆運動」の役割を果たしてきたという小牧の批判は鋭いが，日本人による「探検」の事実を等閑視する姿勢は評価できるものではない。彼には日本の行為を相対化する視点が欠落していた。

（3）地理学から地政学へ　このように探検の歴史を整理し，それが近世ヨーロッパの植民地主義・帝国主義に供されてきたものであると批判した小牧は，『日本地政学宣言』で，当時地理学の主流であった景観地理学も含めた従来の地理学，さらにドイツ地政学を批判し，日本独自の地政学を主張した。これには1939年に発足したと推測される「吉田の会」での研究成果が反映されている[76]。

「従来の地理学はイデオロギー的には無色を擬しつつ，而もその実窃かに欧米的世界の現状を強化せんとする色彩に塗りつぶされた地理学，現状の強化を正当化せんがための理論を追求する地理学」[77]に他ならないと小牧はいう。それは西洋列強の帝国主義の「走狗」だと彼はとらえていた。また，従来の地理学は，「現状のままの諸事象…諸関聯の考究，謂はば，存在の科学…現状維持静観的の学…単なる実証の学，懐疑的無気力の死学」[78]であったと彼は批判した。また，彼によれば，景観地理学は，人間の意志や

71）小牧実繁「探検と地政学」京都日日新聞1月12日，1942，1面。
72）前掲71）1面。
73）前掲71）1面。
74）小牧は，今や独伊や日本による世界新秩序建設運動とともに，「近世」というヨーロッパ的世界に代わり「現代」が始まろうとしているという情況認識を持っていた。①小牧実繁「皇国の進み行く道」京都新聞8月25日，1943，4面。この情況認識に影響を与えたものとして，文化の多元的展開と西洋の没落を説いたシュペングラーの『西洋の没落』や哲学京都学派の「近代の超克」や「世界史の読み直し」という思想が考えられる。②前掲17）72頁。③「座談会：大東亜における白禍を暴く―日本地政学的に見た東亜共栄圏―」週刊朝日12月7日号，1941，12頁。
75）前掲71）1面。
76）1939年12月，室賀により発表された「印度支那半島に於る英仏の侵略とその政策」（前掲1）67-73頁）の附記に「之については前回報告中に詳述したるを以て今省略に従ふ」という一節があることから，会が1939年12月以前にはじまっていたことがわかる。また，「皇戦地誌に関する意見」（室賀信夫他8名による執筆，前掲1）74-83頁）および「学戦原理」（小牧の執筆と見られる，前掲1）84-89頁）と『日本地政学宣言』（前掲17）55-80頁）を対照すると，同会の研究成果が小牧の主張に反映されていることがわかる。よって，以下では元々誰の意見か特定できるものは名前を注記する。
77）前掲17）56-57頁。松井武敏の意見。
78）前掲17）58頁。松井武敏の意見。

歴史の重要性を看過し，その結果，実践性を喪失するに至った地理学であった。[79]

このように批判した彼は，日本の国策の基礎となる，つまり実践性を有する「新日本地理学」を主張していく。[80]それは「当に実現せらるべきあるべき姿の顕示，あるべき諸関聯の考究，謂はば当為の科学としての性格を具有」し，「理論と歴史の科学に対して政策学とも言ふべき科学，更に言へば最高の道徳科学たるの特質を有する」[81]。彼は「欧米的学風の旧殻を脱し真に日本的なる地理学を建設して正しき国策の遂行に寄与せん」[82]とした。彼によれば，この西洋列強の旧世界秩序を維持強化するための地理学ではなく，日本の主体性を明確にし，日本（人）の立場から創りあげた「新日本地理学」こそが日本地政学に他ならないということになる。

当時，日本の地理学界では，東京帝国大学の辻村太郎を中心に景観地理学の研究が盛んだった。この「自然科学的」な地理学[83]に対して，歴史・集落地理学の伝統を持ち，人間と社会問題に関心を有する京都帝国大学の地理学は劣勢にあった。[84]また，当時，教員免許の文部省検定試験受験者を対象とした地理学，すなわち「文検地理学」が大きな力を有していたが，その委員はすべて東京帝国大学・東京文理科大学の関係者であった。[85]米倉二郎が「近時所謂受験地理の横行により，解釈より達意へ達意より啓蒙に逆転せる感深き我が地理学界」[86]と評しているように，「文検地理学」は地理学に必ずしもプラスに作用していなかった。さらに，1930年代は円本時代であり，「諸種の地理書の出版企画がつづき，一種のブームを呈したが…執筆内容の低さで…地理学の研究としての声価を落とした」[87]という事情が存在した。したがって，京都帝国大学の教授に就任した小牧が主張した日本地政学には，これらの研究動向に対する反発・批判，さらに地理学の地位を何とかして向上させようとする意図があったと考えられる。

（4）ドイツ地政学批判　実践性を地理学に回復することを希求する小牧が注目したのが，ドイツ地政学であった。第一次世界大戦後ドイツに興ったドイツ地政学を，彼は「主観的政策の学」[88]であるととらえた。また，ラッツェルの流れを汲んで地政学の体系を樹立したチェレーンについては，「行為する主体」として国家を位置づけた[89]と彼は評価した。それがやがて「地政学そのものに動的な性格を附与することとなり，かかる地政学の影響を受けた地理学，尠くとも地政学的地理学はここに再び実践性を取り戻し，国家の発展に指針を与へ得ることとなつた」[90]と小牧は位置づけた。

しかし，彼はドイツ地政学を次のように批判した。ドイツ地政学が「欧羅巴的世界に誕生し

79）小牧は「静的であることが景観地理学の性格である。…茲に於いては『作られたもの』既成のものとして対象がとらへられ，『つくる行為』，創造する力は顧みられようとしなかつたが故に，それは歴史を拒否したとも言へるのである。…それは，土地に対する既往の人間的恣意，意志による土地改変の可能性の範囲を明らかにすることをしなかつた」と述べている。前掲17）66-67頁。室賀信夫の意見。

80）前掲17）55-80頁。

81）前掲17）58頁。松井武敏の意見

82）前掲48）。

83）前掲７）③174-182頁。

84）飯本信之『地理学発達史』中興館，1940，245-258頁。

85）1929年から1943年までの15年間，一時の例外を除いて，委員は辻村太郎，飯本信之，佐藤弘，田中啓爾，内田寛一の５名に固定していた。佐藤由子「戦前の文検制度と地理の受験者たち―地理学と地理教育との関係を考える―」地理学評論61A，1988，525-540頁。

86）米倉二郎「輓近地理学界の動向と石橋先生」地理学談話会会報３，1936，44頁。

87）石田龍次郎「戦前回顧」（日本地理学会編『日本地理学会五十年史』古今書院，1975）20頁。

88）小牧実繁「序」（米倉二郎『東亜地政学序説』生活社，1941）１頁。

89）前掲17）68頁。室賀信夫の意見。

90）小牧実繁「日本地政学の主張―皇国策としての―」現代22-7，1941，22頁。

た以上，吾々が茲にも欧羅巴的強権主義の発現を見るのは不思議ではない[91]」し，それは「ゲルマン民族生活圏の拡大なる謂はばヨーロッパの覇道主義に貫かれてゐる[92]」ものである。それは「『力』或は『民族』或は『謀略』といつたやうなものを指導原理乃至は指導理念と致すもの[93]」であると小牧は述べた。一方，日本地政学は，「八紘一宇」と「皇道」を「指導理念」にするものとされた[94]。それは，「世界の万邦をして各々其の所を得しめ兆民をして悉く其の堵に安んぜしむと仰せられた神ながらの道[95]」だとされるもので，ドイツ地政学とは対照的に，各地域の住民や文化を尊重し，世界共存を図ろうとする多文化主義的な思想であるかのように見える。ただし，それは天皇のもとにおいてのみ可能であるとされた。小牧はそれをドイツ地政学の「強権主義」・「覇道主義」に対置させることによって，自分の日本地政学を特色づけたのである。

このような性格を持つ日本地政学をすでに1940年に主張していた彼は，アジア太平洋戦争開戦前後から日本地政学協会に集った人々，すなわち飯本信之や江沢譲爾らの地政学が広く世間で喧伝されるようになった時，彼らを暗に指して，「米英思想の余臭紛々たるものに非ずんばナチス・ドイツ的地政論に過ぎない…仮りに若干の日本主義，乃至は皇道の原理を云々するものがあつてもその多くは欧米輸入の既成品に冠するに僅かに日本主義，乃至は皇道の原理を以てするのみ。真に皇国日本の国体に発するものは尠い[96]」と批判した。彼によれば，飯本や江沢らの地政学は「速成地政学」あるいは「直訳的の地政学[97]」であり，「全然主体性の把握なき地政学[98]」であった。また，こうした地政学を喧伝する者を，彼は「歴史を知らぬバタ臭き翻訳地政学者[99]」と呼んでいる[100]。こうして彼はドイツ地政学の翻訳でない，「皇道」に発する地政学，日本の主体性を重んじる日本独自の地政学，日本地政学を主張していくのである[101]。

（5）日本の主体性　では，日本の主体性を明確にし，日本（人）の立場で創りあげた日本地政学とはどのようなものだったのだろうか。

「八紘一宇」と「皇道」を「指導理念」とする日本地政学は，「皇道の分身」であるがゆえに「公正無私なる学」であり，また「世界に於ける皇道開顕の学[102]」だとされた。そして，日本地政学が出発点とするのは，「日本肇国の歴史地理観，即ち吾が肇国の国体観[103]」だという。日本地政学は「従来日本の地理思想の中に脈々として流れてゐたもの，或ひは未だ実現せずとも

91）前掲17）69頁。室賀信夫の意見。
92）小牧実繁「カール・ハウスホーファー論」国民評論15-4，1943，9頁。
93）小牧実繁「皇国日本の地政学」（文部省教学局編『日本諸学講演集第十七輯地理学篇』印刷局，1944）55頁。
94）国松は，「八紘一宇の精神は…すべての日本の学問，…政策の指導原理たるべきもの」で，日本地政学がそれを「指導原理」とするのは結構だが，「この世界観と云ふ高い段階からだけの論議をしてゐたのでは経験科学の論議とはならない」と述べている。国松久弥「地政学と大東亜政策―最近における東亜地政学書の展望―」地理学研究1，1942，711頁。
95）前掲92）9頁。
96）前掲92）10頁。
97）小牧実繁・室賀信夫『大南方地政論』太平洋書館，1945，23頁。
98）前掲90）26頁。
99）前掲55）8頁。
100）小牧は，「翻訳地政学者」の特徴として，ドイツ地政学の無批判な受容や，生活空間を太平洋に限定していることを指摘している（前掲55）8頁）。したがって，「翻訳地政学者」は，飯本や江沢ら日本地政学協会に集った人々を指していると見てよいだろう。小牧ら「吉田の会」のメンバーは，自分たちが史学地理学講座で学び地理と歴史の豊かな学殖を有していることを地政学者として最適の資格だとし，自分たちの地政学をアピールした。米倉二郎「『日本地政学宣言』小牧実繁氏」京都帝国大学新聞11月20日号，1940，2面。
101）小牧は日本地政学を英国・ドイツ・イタリアおよび中国の地政学とは異なるものだと主張した。①前掲17）79頁。②前掲42）1頁。
102）小牧実繁「日本地政学と太平洋戦」実業之日本45-5，1942，46頁。
103）前掲17）80頁。

既に展開の萌芽を蔵してゐたものの覚醒に外ならない[104]」と考える小牧は，呼び方こそ違えども，日本地政学というものの内容が「肇国」のはじめからあることを示そうとした。彼は古くは神話，『古事記』，『日本書紀』，『神皇正統記』にまで遡り，日本地政学の基盤となる内容を発見しようとしたが，佐藤信淵を「近世日本地政学の鼻祖[105]」と述べたことに顕著にあらわれているように，その作業は主に江戸時代の人物を対象としていた。このことから日本地政学は日本の地理学史研究を促進した，あるいは1930年代にはじまった地理学史研究[106]に並行するものだったといってもよい。もっとも『日本地政学宣言』に日本地政学の先蹤として多くの人物が取りあげられて以後は，吉田松陰と橋本佐内を除いて地理学史研究を小牧が深化させた形跡はない。とはいえ，彼の日本地政学は淵源を明治時代以前の日本の思想に求め，特に江戸時代の思想の影響を受けたものである。このような側面は同時代の日本に存在した他の地政学には見られないもので，小牧の日本地政学の特徴といえる。

前述の出発点からして，日本地政学は「復古維新，中心帰一八紘一宇の地政学，究極するところ，天皇信仰の地政学である[107]」ということになる。したがって，日本地政学は，後述の「歴史と地理，地理と歴史時空一如の方法」に基づくために「此の上なく科学的である」一方，「極めて直観的である[108]」。なぜなら天皇など神への信仰によって得られる直観が，日本地政学の基礎をなしているからである。

また，彼の日本地政学は，民俗学の影響もあり，江沢の地政学のような，当時日本に存在した合理主義的な地政学とは異なり，人間の意志や精神や感情に結びつくものに触れようとする性格を有した[109]。これは彼の日本地政学が人間精神を重視しており，機械論的・合理主義的で地理的決定論的なドイツ地政学や日本の他の地政学とは異なる地政学であったことを示すものである[110]。しかし，地理的決定論を排する彼の地政学は，神とか「皇道」といった宗教的なものによって支えられているものだった。

この点こそ，日本地政学が「神がかり」であるとの批判を浴びることになった所以である。アジア太平洋戦争開戦直後発行された『京都帝国大学新聞』には，「雌伏多年，ある時は神がかりとまで悪罵されつつも，ひた押しに学に対する信念に生き，今やその努力が迎へられ注目の的となりつゝあるこゝ地理学研究室[111]」という記者の評言がある。また，1942年10月には，渡辺に「何等内容の伴はない神懸り的表現[112]」と批判された。

では，小牧はその批判をどのようにながめて

104）前掲17）56頁。松井武敏の意見。
105）前掲17）118頁。
106）1930年代，藤田元春，鮎沢信太郎，岩根保重，内田秀雄，室賀信夫らによって，明治以前の地理学を扱う日本地理学史の研究が本格的にはじめられた。例えば，①鮎沢信太郎『東洋地理思想史研究』日本大学第三普通部，1940。②岩根保重「徳川時代地誌の概観」岩波講座地理学別項，1932。③内田秀雄「地理学者としての本多利明」地理論叢７，1935，1-30頁。④藤田元春『日本地理学史』刀江書院，1932。⑤村松繁樹「日本地理学史」岩波講座地理学総論，1934。⑥室賀信夫「並河誠所の五畿内志について」史林21，1936，615-638，811-823頁。これらの研究は1930年代後半から小牧らが主張しはじめた日本地政学と密接な思想的関連性を持つように思われる。したがって，日本地理学史研究がはじめられた背景を探ることは，日本地政学が1930年代後半にあらわれてきた背景を探ることにもなるだろう。
107）前掲92）10頁。
108）小牧実繁『続日本地政学宣言』白揚社，1942，112頁。
109）小牧は「人間は自然の被造者であるが，人間の創造的性質，人間生活に於ける主体的意志活動を否定することはできない」と述べている。前掲17）75頁。
110）日本地政学は，「皇道」により体系化を図ることでドイツ地政学の地理的決定論を拒否したと考えられる。室賀は，今日「ラッツェル…が回顧せられるのは所謂地理的決定論ではなく…彼の思想のうちに流れてゐるいはゞ浪漫的見解でなければならない」と述べている。室賀信夫「地理学の動向」歴史地理80，1942，369頁。
111）前掲59）１面。
112）渡辺光「地政学の内容に就いて」地理学研究１，1942，1180頁。

いたのだろうか。1942年3月に彼は，「私はこの頃神憑りと綽名が附いてをります」[113]と述べており，「神がかり」を自覚していることがわかる。また，1943年3月には，「吾々は屡々，私かに，或ひは公然と『神がゝり』と言はれる。而もこれを『神がゝり』と言ふのならば吾々は常に喜んで神がゝりでこそあり度い。のみならず我が国に於けるあらゆるドイツ的，或ひは甚だしきは米英的地政学徒に向つて，諸子速かに『神がゝり』となれと言むけ度い」[114]と反論している。ここから，一見「神懸り」的な性格を持つ日本地政学に，彼が自信を持っていたことがわかる。なぜなら，日本の主体性を明確にした日本地政学を通して彼が主張しようとしたのは，学問研究は客観的でも中立的でもなく，西洋という主体の意思を色濃く反映したものであるという問題であったからである。このことは，「科学性と客観性，その名は麗はしい。而もそれは欧羅巴の文化の掠奪的性格を偽装する以外の何物でもなかつたのだ」[115]と彼が述べていることからうかがえる。

（6）使命および方法論　では，ドイツ地政学とも日本の他の地政学とも異なる日本地政学の使命は何であったのか。第一に，近世ヨーロッパ人による探検の歴史を整理し，植民地化の歴史を明らかにし，それによる世界の「歪曲」と「矛盾」を発見し，その是正に対する指針を与えること[116]，それを通して植民地主義を批判することを使命とするものであった。小牧は西洋による侵略以前の姿，「本然の姿」に世界をかえすべきことを主張した。第二に，「皇国日本の正しい進路を示すことにより天業の恢弘に翼賛し奉るべく現代八咫烏の使命を果」[117]すこと，一国の政治や世界新秩序に方向と指針を与えること[118]，「神ながらの皇道に即する政治政策を考へること」[119]を使命とした。

第一の使命は，一種のアジア的農業社会を基盤とする運命共同体へ回帰しようという主張とも解釈できる。この主張には，民俗学の影響の他，ヨーロッパ東漸以前にもアジア人の歴史があり，そこに歴史的世界があるという哲学京都学派の「世界史の哲学」に見られる思想が影響しているといえないこともない[120]。ともあれこの主張は，欧米列強による東アジア市場の独占支配に起因する日本の経済苦境，人種的偏見に由来する国際社会における日本（人）の差別的な待遇を感じていた当時の人々の間に，大きな反響を呼ぶことになった[121]。

しかし，この主張は久武が指摘するように，西洋列強の侵略を浮彫にするそれぞれの土地「固有の土着性」がそもそも措定し得るものなのか疑わしい[122]。また，この主張が目標とするのは，西洋列強の植民地を西洋人に代わって日本人が統治し，そこにアジア的農業社会を実現することだった。したがって，この主張は植民地化それ自体を否定するものではなく，日本人に

113）前掲66）③155頁。
114）前掲92）10頁。
115）小牧実繁「アジアの地政学―特に民族と文化とに重点を置いて―」理想日本1-2，1942，42頁。
116）前掲17）86頁。
117）前掲71）1面。
118）前掲17）135頁。
119）前掲40）133頁。
120）ただし，小牧は同学派を批判しているし，河野によれば，小牧は同学派に強い反感を持っていたようである。小牧ら「吉田の会」と哲学京都学派との思想的関連性は，今後検討していく必要があろう。①小牧実繁ほか「『決戦言論の方途』座談会」現代24-2，1943，50頁。②河野通博「地理教室の追憶」京都大学地理学談話会会報8，1997，6頁。
121）Takeuchi, K., 'The Japanese imperial tradition, Western imperialism and modern Japanese geography' (Godlewska, A. and Smith, N. ed., *Geography and empire*, Blackwell, 1994), pp. 196-198. この試みは，一般大衆には感情的な側面で共感を得ることができただろうし，政治的エリートには日本の拡張政策を正当化する学説として注目されるに至ったであろうと筆者は考える。
122）前掲5）③66-78頁。

よる植民地化を正当化するものである。日本の絶対性を確信する小牧には，日本の行為を相対化する視点が欠如していたといわざるを得ない。しかし，第二の使命が示すように，彼には日本の国策に反対する意図が最初からないので，むしろ国策を正当化する理論を提示しようと模索するなかで，「本然の姿」の主張にたどり着いたものの，それは依然として国策を完全に正当化し得るものではなかったと解すべきであろう。この目的を先行させ，それに合わせ論理を組み立てようとする姿勢は，日本地政学の根本的な欠陥といえよう。

小牧によれば，前述の使命を達成するためには，「歴史と地理，地理と歴史の一体的研究，時間と空間，空間と時間，時空一如の研究」[123]が必要だという。ただし，ここでの歴史の研究は，「単なる古文書の解釈」や「単なる歴史事実の考証的な研究」といった「死学としての歴史の研究」ではなく，「時間の軸に従ひまして過去を見ながら現在に至り，更に未来を指向するといふやうな歴史の研究」を意味する[124]。また，ここでの地理の研究は，「単なる盆地とか，単なる島とか，切り離されたものとしての地域地域の地誌的な研究といつたもの」ではなく，「内外一通，空間の軸に従ひまして，要するに世界を一体と見，これを綜合的統一的に考察するやうな，即ち地理の大観を可能ならしめるやうな研究」を意味する[125]。彼によれば，この「時空一如の研究」により「最もよく事物本然の姿を開明すること」[126]が可能になる。そして，その結果その他の使命をも達成し得るのである。この「時空一如の研究」とは，世界を一体のものとしてとらえ，ある地域が世界史的にいかなる意義を持つものかを明らかにしていくものである。さらにいえば，グローバルな連関をもった近代世界史のなかで，ある地域を動的に，形成的に把握することといえよう。したがって，「時空一如の研究」は，「一つの高次の学問の研究」[127]といい得るものであり，「最も正しい意味に於ける歴史地理学に外ならない」[128]と彼は述べた。室賀信夫も，『日本地政学宣言』は「地理学の問題に限るならば，この学問に於ける歴史的思考の復帰を提唱されたものとして理解してよい…日本地政学とは新しき意味に於ける歴史地理学だと解しても差支へあるまい」[129]と述べている。

日本地政学がこのような性格を持つに至ったのは，歴史地理学の伝統を持つ京都帝国大学地理学教室で学び，日本地政学を主張する以前，自らも歴史地理学者として活動していたという小牧の個人史的背景と関係がある。同大学で「歴史と地理との関聯的研究の訓練を受け得たことは，何物にも替へ難い大きな収穫であつた」[130]と彼は述べている。また彼は元々歴史と地理は一体であり，二者が分離した時，地理学の危機が兆したという地理学観を持っていた[131]。ここから小牧の日本地政学が，地理学の歴史学への接近，すなわち地理学における歴史的な側面・時間的要素を再評価する試みだったことが看取できる。

では，このような性格を持つ日本地政学を，なぜ彼は「日本地政学」と呼んだのだろうか。1941年に執筆した「日本地政学の主張」という

123）前掲102）46頁。
124）前掲42）4頁。
125）前掲42）4頁。
126）前掲42）5頁。
127）前掲42）5頁。
128）小牧実繁「歴史地理学」日本諸学振興委員会研究報告11，1940，247頁。
129）前掲110）370頁。なお，東洋史学者の羽田亨も同様のことを述べている。羽田亨「推薦の辞」（別技篤彦『蘭領印度（世界地理政治大系）』白揚社，1941）。
130）前掲17）185頁。
131）前掲17）147頁。

文章から，彼が歴史地理学的性格を有する日本地政学を「政策学」であると考えていたこととともに，日本地政学という名称を確定したものと考えていたわけではないことがわかる[132]。日本地政学は単にドイツ語 Geopolitik の直訳である「地政学」の前に「日本」を冠しただけの名称ではない。ただし，室賀によれば，ドイツ地政学は「世界新秩序建設の運動」である点で「地理学に於ける理想主義」と見なし得ることから，小牧は同じく世界新秩序建設を目指す彼の主張を敢えて地政学と呼んだのである[133]。また，地政学の名は『管子』の「地は政の本なり」に由来するともいえる[134]。地政学の前の「日本」は，日本の主体性を重んずる彼の姿勢を示すものである。

ともあれ，上記の使命を「時空一如の研究」という方法により達成し得る日本地政学は，「皇国有用の学」[135]であると彼は主張した。そして，彼はこの方法に対し，「考へに考へ抜きました挙句の末考へ着きました方法」であり，「此れ以上に優れた方法といふものはない」と述べ[136]，かなりの自信を示した。「皇国日本の進路は日本地政学の方法による以外にはその真に正しいものが発見せられない[137]」，日本地政学は「時空一如の研究といふ確乎たる方法」の上に立つがゆえに「此の上なく科学的である」と彼は主張した[138]。

では，この方法は当時の地理学界でどう評価されたのだろうか。国松は，小牧の日本地政学が提示する方法が画期的な方法とはいえないことを指摘した[139]。小牧が強調するこの方法が，説得力のあるものとして学界に受け止められたわけではなかったことを示す一例である。こうした批判も影響したのか，この方法に対する小牧の自信は以後，多少の揺らぎを見せるようになった。1943年1月から2月にかけておこなわれた講演会での発言に，そのような揺らぎが見られる[140]し，また，同年11月の講演会でも同様である[141]。要するに，時間の経過につれ，歴史の研究と地理の研究を兼ねおこなうこの方法により，多くのことが見えてくるのは確かだが，それを実行するのは難しいと，彼は考えるようになったようである。

IV 結 論

以上のように筆者は，日本地政学の思想が確立される背景や過程を，その主唱者である小牧実繁の個人史的側面に注目しつつ検討してきた。まず，英国観の転換，移民問題と満州，地理学をめぐる問題意識という日本地政学を主張する以前の彼の経験と思想的な志向性に注目し，彼が日本地政学を主張するに至った背景を確認した。次に，彼の主張した日本地政学という思想の諸側面を検討することで，その思想的構成がいかなるものなのかを検討した。これらの検討から，日本地政学は，その主張が部分的には説得力を持っており，それゆえにこそ当時の日本人に受け入れられたことが見えてくる。そのよ

132) 前掲90) 25頁。同文章で小牧は，日本地政学の別称として「日本地理歴史政策学」，「日本歴史地理政策学」，「日本世界政策学」，「皇国策」といった名称を提示している。ただし，名称の揺らぎが見られるのは1941年までで，以後彼は一貫して日本地政学という語を使用した。
133) 前掲110) 370頁。
134) 前掲48)。
135) 前掲71) 1面。
136) 小牧実繁「探検と地政学」地理論叢12，1942，4-5頁。
137) 小牧実繁「日本地政学の将来―行くべき道と行かざるを得ない道と，理想と現実と―」政界往来13-10，1942，25頁。
138) 前掲108) 111-112頁。
139) 前掲94) 712頁。
140) 小牧は，「時空一如の研究」はあくまで「理想」である。「観念的に考へるのは易しい」が，「現実の問題になると甚だむつかしい」，特に「一個の人間の能力」では「不可能に近い」と述べている。前掲97) 27頁。
141) 前掲93) 56-58頁。

うな面が「光」であるとすれば，そこには必ず超越的な論理や，日本を絶対視するゆえに覆い隠された論点があり，「影」の側面がつきまとっているように思われる。いわば「光」と「影」という思想的な両義性が大きな特色であったように思われるのである。

日本地政学は，これを構成しているいくつかの論点・主張を取り出せば，その一部には正当性ないし論理性があり，かつ時流に乗り得たこともあり，当時一つの知の体系として人々に受け入れられるに足るものだった。このことが戦後も変わらず，小牧の自信を維持させることになったのであろう。1980年に，彼は「戦後三十五年生き永らえて来たのであるから，何とかして今後も中外に施して悖らない日本地政学の確立に精進したいと思っている[142]」と述べ，彼が戦後も変わらずに抱いた日本地政学の「正しさ」の信念を表明している。しかし，日本地政学は，全体としては多くの欠点を有していた。以下，日本地政学の「光」と「影」を指摘したい。

日本地政学は地理学に実践性を回復させ，その地位を向上させようとする試みであった。日本地政学を主張する以前の小牧の地理学観や，実践性を失った同時代の景観地理学や「文検地理学」に対する反発・批判がその背景にあった。戦後も，地理学の存在理由の脆弱さに危機意識を持つ動きは絶えずある。この意味で，小牧の日本地政学は一つの参考事例として位置づけられる。しかし，彼は地理学の実践性を帝国主義の展開と戦争協力に見出した。学問が実社会にコミットすることは必ずしも非難されることではないが，平和な世界の実現のためとはいえ，日本地政学が殺戮を容認したことは評価できるものではない。

歴史と地理の一体的研究，つまり「時空一如の研究」により「本然の姿」を明らかにし得るとする日本地政学は，地理学における歴史的な側面・時間的要素を再評価する試みでもあった。京都帝国大学地理学教室の学問的伝統や彼が抱懐した地理学観の影響が看取できる。また，アジアなどの欧米の植民地を侵略以前の「本然の姿」にかえそうという日本地政学の主張は，ヨーロッパの植民地主義批判の方法を模索していたといえる。また，一種のアジア的農業社会を基盤とする運命共同体へ回帰しようという趣旨とも解釈し得るこの主張は，東アジア市場における西洋列強の支配により経済活動上の困難を覚え，国際社会において人種的偏見により日本が差別的な待遇を受けていると感じていた当時の日本人の間に，大きな反響を呼ぶことになった。しかし，「本然の姿」を主張する日本地政学は，日本の植民地政策を正当化する理論でもあった。「本然の姿」は天皇のもと，日本人の統治下でしか実現されないものとされた。また，「本然の姿」はきわめて恣意的な歴史的解釈の上に設定されたものだった。

日本の主体性を明確にした日本地政学を通じて，彼は学問研究が客観的でも中立的でもなく，西洋という主体の意思を色濃く反映したものであると主張した。ナショナリズムが高揚し，対欧米戦争に突入しようとしていた戦時期という時期にあっては，社会・人文科学の場合，どの学問分野もいつかは日本の立場を考えざるを得なかった。そのような情況において，彼はその立場を正面から積極的に論じようと試みた。日本地政学は，日本の立場で創りあげた地政学であるという意味で，存在そのものが近代ヨーロッパ批判・植民地主義批判たり得ていた。しかし，日本の主体性を明確にした日本地政学は，日本の絶対性を確信するあまり日本の行為を相対化する視点を欠いていた。さらに，彼の主張は終戦とともに大日本帝国と心中するかたちに

142）小牧実繁「戦前，戦中，戦後」湖国と文化12，1980，17頁。

なり，戦後，地理学研究における主体性の議論を忌避させた原因の一つになったともいえる。

日本地政学は，当時日本に存在した他の地政学とは異なり，人間の意志や精神や感情の領域にまで足をふみ入れようとする性格を有した。それ自体は人間精神の重視と解することもでき，一概に否定されるものではない。しかし，彼の地政学は神とか「皇道」といったあいまいなものによって支えられているものだった。このことが「神がかり」という批判を引き起こすきっかけとなったことも否めない。

日本地政学は，西洋列強の植民地主義批判など，個々の部分では受け入れられるべき主張であるにもかかわらず，全体としては，受け入れがたい主張に堕してしまっている。それは，部分では，科学的・客観的な作業をおこなっているにもかかわらず，全体では，主観的・直観的判断が重要視されているからである。それは，目的が先行し，それに合わせ論理が組み立てられていること，あるいは結論があらかじめ用意されていることに拠るものだろう。

このように日本地政学という思想は，いわば「光」と「影」という両義性を持つものである。したがって，日本地政学を全体としてとらえる時，「光」あるいは「影」のどちらか一方のみをピックアップし，それを以て評価を下すことは避けなければならないだろう。

最後に，今後の課題と，日本地政学を研究することが有する意義を示して本稿を閉じたい。筆者は，日本地政学は主に次の3つの部分から成り立つと考えている。第一に，一つの学説・理論という部分，第二に，国民の啓蒙活動という部分，第三に，陸軍の戦略への関与という部分である。本稿では，第一の部分の考察をおこなったことになる。したがって，次稿では，第二の部分，すなわちアジア太平洋戦争開戦前後からはじまる日本地政学の展開の時期における小牧の言説を追跡することを通じて，日本地政学が社会にいかなる影響を与えたかという問題を考察したい。その考察を通して，日本地政学がなぜ支持され，なぜ成立したかという理由がより一層明確になるだろう。また，アジア太平洋戦争開戦とともに日本地政学がどのような変貌を遂げるのかも考察したい。なお，第三の部分，特に「吉田の会」については，まず事実関係の確認作業から取りかかりたい。[143)]

日本地政学を研究することは，京都帝国大学地理学教室の〈知の系譜〉を探る研究，ひいては20世紀の日本地理学史の研究として意義を有するものであろう。さらにこの研究は，知識人の政治参加や，地理学の社会的有効性・政治性といった議論を深化させることにつながるだろう。なお，今後の研究を通じて筆者は，小牧の主張が同時代のなかでいかなる意味を持っていたのか，なぜ日本地政学が成立したのかという問いに，より十分なかたちで答えていきたいと思っている。

［付記］ 小牧家所蔵の資料閲覧に御協力いただいた小牧の三男平野健男・徑子御夫妻ならびに貴重な助言を賜った久武哲也先生（甲南大学）・長谷川孝治先生（神戸大学）・山崎孝史先生（大阪市立大学）・大城直樹先生（神戸大学）に深甚なる謝意を表する。なお，本研究の骨子は，2005年7月におこなわれた第48回歴史地理学会大会で発表した。

（京都大学・文学研究科・院生）

143） 注11）を参照。

Saneshige Komaki's "Japanese Geopolitics" and its Ideological Establishment

SHIBATA Youichi
Graduate Student, Department of Geography, Kyoto University

The purpose of this paper is to examine the ideological establishment of the geopolitics of Saneshige Komaki (1898-1990), who was a Professor of Geography at Kyoto Imperial University, and a well-known advocate of "Japanese Geopolitics" during World War 2, and accordingly a remarkable figure in the history of Japanese geography. Approaching this subject biobibliographically, I focus on the personal background of Komaki. Using his own bibliography, and through an analysis of his written works, I trace the development of his thought.

To begin with, I demonstrate the ideological background of Komaki's geopolitics. Komaki had a great antipathy toward Western imperialism. In addition, immigration issues closely related to racial discrimination were his great concern. He held the view that geography in those days had lost its social relevance, and that the nature and culture of each land should be maintained under an indigenous order.

Next, I examine the ideological composition of Komaki's geopolitics. His geopolitics began before the outbreak of the Sino-Japanese War in July 1937. He asserted that "Japanese Geopolitics" was indigenous and one which attaches importance to the autonomy of Japan, after he had criticized the history of Western exploration, conventional geography, and *Geopolitik*. His geopolitics tried to clarify what was destroyed by Western colonization and had an historico-geographical and irrational character.

Lastly, I point out some of the positive and negative aspects of his geopolitics. The social relevance of geography, his criticism of Western colonialism and the issue of positionality in research can be seen the light of Japan at that time. On the other hand, the lack of an attitude to relativize Japan and the subjective/intuitive judgement in the reasoning process were negative aspects. However, the positive and negative are not clearly divided. "Japanese Geopolitics" has suggested important issues in connection with the political nature and the social relevance of geography and geographical knowledge, although it served to justify the aggressive wars of the Japanese Empire.

Key words: Saneshige Komaki, Japanese Geopolitics, Kyoto Imperial University, history of geography, biobibliographical study